〈寄稿論文〉

ソーシャル・サポート・ネットワーク

——理論と研究方法の概観——

南　　裕　子*

はじめに

人間の社会構造と，その社会の一員である個人との関係に関する考え方として，個人を取巻く人の網の目，すなわち social network の概念が初めて提唱されたのは，ノールウェイの漁民の調査をした社会人類学者の J. A. Barnes (1954) によるものであった[1]．その頃のこの領域における研究者には，都市における家族，特に夫婦の役割と social network との関係を調査した E. Bott (1357)[2]，やアフリカの都市への移住者の間にみられる social network と同一の social network 下にいる個人の行動との関係を研究した P. Mayer がいる[3]．それ以前の研究では，社会構造の概念と個人の行為の概念との間には大きな溝があったのが，個人を中心として社会構造を見る social network の考え方が，その溝を埋めるものとして社会学者や人類学者に高く評価され，その考え方に従った研究が増加するようになった[4]．

そういう流れの中から，健康に関連する科学の領域でも，social network 概念を用いた研究が行われるようになった．著名なものとしては，アメリカ合衆国の the Joint Commission on Mental Illness and Mental Health による調査である．それによると，精神的な問題を抱える人々の大多数は，精神医学や

* 聖路加看護大学教授　連絡先：東京都中央区明石町10—1

心理学の専門職を訪ねるよりも，家族や友人，隣人，牧師，または近所の医師を頼りにすることがわかった．この研究結果がやがて，地域精神衛生の活動に関する研究の方向性を導くことになった．すなわち，1978年に発表された精神衛生に関する諮問委員会から出された大統領への答申である[5]．この中で，地域精神衛生活動にとって，自然発生的に存在する social support の重要性が指摘されたのである．

一方，身体的な疾病と社会環境との関係に関しても，多くの論文が発表されるようになった．Cassel は，社会において中間的な立場にいる人々に結核や分裂病，アルコール中毒などの病気が多発することに注目した結果，これは，その人にとって意味深い社会的な接触が欠如しているためではないかということに気づいた．そして，「社会心理的な変化が，ストレッサーを条件づけるものとして，身体の内分泌系のバランスを変え，病原に対する生体の感受性を高める」という仮説を提唱した[6]．従って，ストレスの高い現代社会では，ストレッサーに曝されることを少なくするよりも，social support を改善したり，強化することのほうが，より実際的であり，適宜であるというものである．

このような背景の中から，1970年代の後半から急速に social network や，social support と様々な健康問題との関係が研究されるようになった[7)~15)]．医療関係の雑誌がこの分野における特集を組んだり[16]，American Nurses Association, Commission on Nursing Resarch でも，Social Support Network を個人と家族の安寧と健康的な機能に関する個人的，環境的決定因子の例として，今後さらに研究されることを期待していると発表した[17]．

しかし，日本においては，Social Support Network と健康問題との関係が実際に研究されるようになったのはごく最近のことである．従って，この時期にSocial Support Network の理論と研究方法を概観し，日本の社会心理的，文化的状況を鑑みて，この領域の研究課題を展望してみたい．

Social Support Network 理論と問題点

Social Support Network の理論の提唱や研究が本格的に行われるようになったのは，極めて最近のことであるので，この現象に対する用語も様々である．たとえば，provisions of social relationships, social bonds, social network, personal network, personal social network, support systems, social support systems, および social support などがある．これらの用語は，研究者の関心の領域によって少しずつ内容が異なるが，全体としては，類似的に用いられていると言ってよいだろう．構造的な側面を social network, 機能的な側面を social support と区別して用いている人もあれば，どちらかの用語だけを用いていても，内容にはその両側面を含めている人もいる．この論文では，Social Support Network という用語を用いて，これらすべての概念を含めるが，用語の定義と概念の構造を説明するのに，ふたつの大きな概念である，social network と social support に分けて考えることにする．

概念の定義と特徴

1. social network

social network に関する研究は，1970年代半ばから始まった social support に関する研究よりも約10年早く始まった．その当初には，どちらかというと，隠喩的な意味で用いられていたが段々と精密で分析的な概念になっている[15]．代表的な定義には，Mitchell の「ある一定の人々の間にみられる特定の結びつきであり，その結びつきの特徴をみれば，その network に組み込まれた人々の社会的行動を解釈しうるような特質をもつ」[19] がある．その広がりは，「個人の直接的な社会的接触を持つ人々，その人々の間の関係，および個人が繋がりをもつ人々がさらに繋がりをもつ人々，すなわち，その個人にとっては間接的な繋がり」[20]まで拡大する．この考え方は，「そのような結びつきは，社会構造の基本的構成要素であり，network の構造やその構造の保持や破壊は，社会的

過程の普遍的で基本的なものである」[21] という前提に立っている.

この概念の構成要素として，下記のような側面が提唱されている.

1) 個人からみる network の階層

Pattison and Pattison によれば，個人からみる network は，五つの階層からなる[22].

a．個人的環帯：きわめて私的な関係の人々が含まれる．たとえば，家族や恋人.

b．親密的環帯：情緒的に親しい人々が含まれる．親友や親戚の人々，同居者など.

c．実務的環帯：仕事上や社会的な役割を果たすときに助け合える人々，隣人，同僚，上司など.

d．公式的環帯：礼儀上のつきあいが主.

e．拡大的環帯：その他にその人が間接的に関わっている人々.

このうち，a～c までを primary network と呼ぶことが多い．primary network は，「その個人にとって，主として情緒的に愛着のある繋がりがあり，そこから人は社会心理的資源を享受する」[23] と定義されている.

それは日本社会ではどうであろうか．土居による「甘え」の社会心理的分析からみれば[24]，日本人からみた社会的環境は次の四つの関係から成るといえよう.

a．身内の関係

b．身内のような関係

c．義理の関係

d．他人の関係

Pattison たちのモデルにおける個人的および親密的環帯は，日本人の a と b に対応し，日本人の義理の関係は，Pattison らの c と d に相当する．また，「他人の関係」は，Pattison らの「拡大的環帯」に当たろう．従って，日本人の primary network は，a から c までを含むことになろう．著者の行った調査によれば，日本人の青年女性の場合には a，b，c，の関係を常に意識して，区別して周囲の人々とつきあっている傾向があることが明らかになった[25].

2) social network の構造的および内部的特徴

social network の構造的および内部的側面の主なものには，1) サイズ（個人がつきあっている人々の数），2) 密度（network に含まれている人々の間で知り合っていたり接触のある度合），3) 緊密度（むすびつきの強さ，関係の情緒的深さ），4) 継続性（安定した関係の継続度），5) 多様機能性（ひとつの関係のもつ機能の数，その関係がひとつの機能しか果たさないか，または複数の機能を提供しうるか），6) 相互性（その関係が両者にとって役立つのか，それとも一方的であるか），7) 頻度（その人が network 成因と接触する頻度），および 8) 均質性（成員の特徴の類似性）があげられている[26)27)].

2. social support

患者や家族に対する支援の考え方は，1960年代から存在していたけれども，social supprt という概念を用いての研究は1970年代後半から行われ始めたものである．social support およびその類似語に対する定義は，social network よりも多く，多様な学問領域において注目されていることもあって，未だ明白な同意は得られていない．地域精神衛生の分野では，Caplan が，support system を，「人がひとり，または複数の他者（集団）との間に結ぶ，継続する複数の関係によって成立つものであり，その人が生活の一般的な問題に対処するのを助けたり，特定の長期的な重荷やまたは何かが欠けているのが長く続いたりする時に，対処しうるように特別な援助を提供する」と定義している[28)]．社会学の分野では Weiss が，「人は，次のようなものの提供を得るために他者と関係を結ぶ」とし，愛着や社会的統合性，養護の機会，自分の価値の保証，頼りになる人の存在，および様々なガイダンスをあげている．彼は，これを社会的関係の提供（provisions of social relationships）と呼ぶ[29)].

このように，social support は，一人の人が，周りの人々との関係をとおして何を得ているかという視点からの定義づけが多い．たとえば，Cobb は，「個人が確かにそうだと信じられるような情報，つまり次のような情報のひとつ，またはそれ以上を提供されるような関係を support」と定義する．

a．自分はケアされ愛されているという情報（情緒的サポート）

b．自分は評価され，価値があるとみられているという情報（評価的サポート）

c．自分は相互的責任を果たすべき network に所属しているのだと信じられる情報（社会的サポート）[30]

House は，上記のような機能の他に，実際的手助けを含めている[31]．これは，Kahn の定義でもそうである．Kahn は，護送（convoy）という概念を打出している．すなわち，人は，その人生の中で，様々な人々と出会い，ある人人とは長い付合いになり，ある人々は，別れてゆく．しかし，成人では，一人の人の network のサイズは大体一定している．その人々との交流を通じて人は他者から，好意や，保証や助力を得るというものである[32]．

ところで，この social support に関する定義は，表面的には多様に見えるが，それは用い方や強調点が異なるのであって，内容的には類似していることに気づく．少なくとも，social support は，人が他者から情緒的および手段的な助力を得ていると認知するものであるという点に関しては同意が得られているように考えられる．問題は，これらの要素が network 成員の中で，何故与えられたり，与えたりするのか，また，これらの要素はお互いどのような関係にあるのかに関しては，いずれの理論においても明白な記述に欠けている．

なぜ人は，このようなサポートを得るために，他者と交流するのであろう

表1　依存とsocial supportの概念構成の比較※

依存（Dependence）		Social Support	
高橋，1968	Clough & Derdiarian, 1980	Weiss, 1974	Kahn, 1978
下記のようなことを求める行動	Behavior seeking for	Provisions of social relationships including	Interpersonal transactions including
身体的接触を求める	physical contact proximity	(attachment)	
注意をむけてもらう	attention	social integration	affirmation of behaviors, perceptions, and views
助力を求める	help, physical help	sense of reliable alliance obtaining guidance	aid
保護を求める	recognition, praise, and approval	reassurance of worth	affect(feeling respected or admired
心の支えを求める	(proximity)	attachment	affect(feeling liked or loved)
		opportunity for nurturance	(notion that social support involves giving or receiving)

※文献[25]から抜萃

か．筆者は，social support の構成要素を調べるうちに，それが依存の研究で用いられる要素と類似しているのに気づいた．表1にその対比を示したが[33]，依存欲求には，1）身体的，情緒的接触，2）他の人からの注目，3）他の人からの承認，4）実際的手助け，5）他の人からの好意，などを求めることが含まれている[34][35]．ということは，人は，依存欲求に基づいて他の人々と交流し，片方の social support を提供する人は，相手のそういう依存欲求に対応しているのではないだろうか．従って，social support は，実は人間の依存欲求を満たす社会的機能であるともいえるのではないかと考える．

Social Support Network の前提と問題点

social network および social support の文献を検討して Norbeck は，これらの概念の前提として次の点をあげている．

1. 一生を通して人は，他の人々と支援関係をもつことが必要であり，その関係によって，日常的に生じる役割上の責任を果たし，人生の節目，節目に起こってくる課題に対処できるとともに，時々生じるストレス状況にも対応できる．

2. social support は，人間関係の network の中で，与えたり，与えられたりする．

3. network 上の関係は，比較的持続するものである．特に，個人にとって身内的な，第一次的な結びつきを構成するような人々との関係ではそうである．

4. 支援的関係は，基本的に健康なものであって，本質的に病理的ではない．

5. 必要とされる支援の量やタイプは，個人によって決められるものであるが，それは，個人差や状況の特徴に依って異なる．

6. その人が活用しうると思う支援の量やタイプもまた，個人差と状況によって異なる[36]．

このようにみてくると，Social Support Network 理論の限界がみえてくる．

第一に，これはひとつの理論と呼べるのであろうか．Mitchell は，「network 分析は，ひとつの理論を提唱しているのではないということを認識することが大切である．この分析は，一群の現象の描写であって，これが役立つかどうかは，その分析が依って立つ理論的基盤に同意しうるかどうかによって異なる」と警告している[37]．事実，研究者によって，交換理論や役割理論，適応理論や疫学，成長発達理論および一般システム理論など依拠する理論が異なっている．Social Support Network 分析は，研究の焦点となる現象を明示しても，それをどのように解釈するかは，その人の学問的背景に依ることになるというものである．しかし，Mitchell の時からこの領域の研究や理論化はめざましい発展を遂げているので，Merton の主張する中範囲理論のひとつとして[38]，学際的な期待が寄せられているといえよう[39)~44)]．

第二の問題は，Social Support Network が，個人を取巻く社会的環境であるとみられるのに，それが実際にはそうであるかどうかに関する疑問である．その環境の決定因子としての個人の能力の問題である．つまり，個人の社交または社会的能力が発達していれば，適切な Social Support Network を得ることができるが，そうでなければ，適切な Social Support Network を発展することができないのではないかという指摘がある．こういう個人のもつ社会的能力を Heller 等は social support に対するライバル概念と呼ぶ[45]．

第三の問題は，social support が主として人間関係の健康な側面だけをみているという点である．特に健康問題との関係でこの現象を分析する時には，これでは片手落ちになる危険がある．つまり，ある種の関係では，どちらかというと重荷や苦痛になることはあっても，支援にはならないことがある．ある一つの関係を取ってみても，援助的な側面と逆に苦痛を与える側面とが両立していて，そのバランスによって人は，その関係を継続している．また，日常的には存在が重荷であっても，ある特定の場合には助かるということもある．そういう複雑な関係の揺れ動きをこの概念では表現しきれない．特に，成人であっても，人間関係が選択によって構成されているわけではない日本社会では，この問題は大きな今後の課題になろう．

第四には，Social Support Network 分析が，個人の認知する実態に焦点を当てている点である．これは，従来の客観的な公式的社会分析と異なる長所でもあるが，一方では，実際には存在する Social Support Network をその人の認知能力によっては，見過ごしかねない，ということが起こる．たとえば，精神障害者の場合には，social network のサイズが健康者に比べ小さく，network members と当人との関係が相互的でないことが多いと指摘されている[46]．これには，色々の要因が考えられるが，その中には，存在する Social Support Network を適切に認識することができないという認知能力の問題も内在していると考えられる．

Social Support Network の機能に関する二つの仮説

個人がストレスや危機に曝された場合，Social Support Network が健康や安寧にどのような機能をもつかということに関する仮説は二つあり，いまだ論争と検証の最中にあるといえよう．ひとつは，ストレスや危機状況にある人にとって，Social Support Network は，ストレスの認知の程度や，その健康への影響に直接的に働きかけてその状態を緩和するという仮説である[47]．

もうひとつの仮説は，ストレスが生じる過程とそれが健康に影響する過程に介入して，緩衝的に働くというものである[48]．つまり，あまり大きすぎるストレッサーや逆に余りにも小さなストレッサーには，social support は役立たないけれども，そうでない場合には，ストレッサーとそれを受ける個体との間に立ってクッションの役割を果たすというものである．この二つの仮説は，研究により支持されたり，支持されなかったりしている．たとえば，看護婦の心の健康とストレスおよび social support との関係を探る研究では，後者の仮説を支持した研究結果は存在するが[49][50]，少ない．これには色々の原因が考えられるが，その中でも緩衝作用をどのように測定し，分析するかが大きな課題であろう．

一方，social support がストレスの認知の仕方やその結果としての健康状態に直接的に影響する研究は，すでにいくつか報告されている[51]~[53]．筆者らの

研究でも，social support が仕事からくるストレスの認知に対して有意に影響するという仮説は支持されなかったが，social support がもえつき現象に対しては有意な影響を及ぼすことが判明した[54]．

また，social support の内でも，どのようなサポートが効果があるのか，また，誰からのサポートが効果的かに関する研究が行われ，social support の研究は，状況に応じた support という視点へと移ってきている．たとえば，既婚者と未婚者との違いによって[55]，また，家族と同居している人とそうでない人とでは[56]，同じような場で働く看護婦でもその social support の役立つ側面が異なることが明らかになってきている．

他の分野でも social support がストレスとの関係でどのように影響するかについての研究が行われているが，しかしこの2つの仮説に関する検証は今後の課題といえよう．

Social Support Network の研究と問題点

Social Support Network を概念枠組として研究を行う場合には，どのような方法が用いられ，そこにはどのような問題が存在するのかを，著者の限られた資料の中から概観したい．Social Support Network の研究は，きわめて私的な世界を問うことになるので，対象者のプライバシーへの侵害の危険性を極力少なくして，個人の秘密堅持の工夫をどのようにするかの配慮が必要になる．また，人間は，どのような人々と支え合っているのか，また自分にとっては重要な人物が同じ思いでいるのかに関してなどの現実を常には直視しているわけではないので，そのために研究の信頼性や妥当性，さらには倫理性が吟味されなければならないだろう．

研究デザインについて

現在用いられている研究デザインには，自己記述式調査法，面接調査法および参加観察法がある．

1. 自己記述式調査法

これには，一括質問紙法[57)~62)]と日誌式記述法[63)]とがある．前者はある時点における個人の認知する Social Support Network の実態を質問紙を用いて問うものであり，後者は，一定の期間毎日どのような人々とどのような目的でどのようにしてつきあったかを，尺度表に基づいて対象者が自ら記入する方法である．前者が対象者の認知する世界を前提にして問うのに較べ，後者は，実際の出来事を事実に即してより客観的に問うものである．どちらが研究法として適切かは研究の目的によって異なる．後者がより信頼性や妥当性が高いとは断定できないだろう．前者は多数を対象とする時用いられやすいが，質問紙に反応しうる能力があることが前提であるので，視力障害があったり，筆記能力の未発達，もしくは障害のある人々には不適切である．また日誌式記述法の場合には，毎日私的な生活を記述する負担があるので，協力が得られにくい欠点がある．

2. 面接調査法

これには，open-ended と close-ended がある．Social Support Network に関して face-to-face で問う利点としては，対象者との関係を成立させることで初めて聞ける情報もでてくる．特に network member との関係がその個人にとってどのような意味をもつかという視点では，自己記述式では得られにくい情報が得られることになろう．ただ，たとえば，西尾は，精神分裂病の患者を対象とした研究で，「この人達との関係を聞かれることは，自分の病気を聞かれるのと同じ」という理由で協力拒否に出あった経験を述べているが[64)]，筆者も異文化に生活する日本人を調査した時似たような体験をした．自我構造が脆弱化していたり，心細い思いをしている人々にとって，現実直視の苦痛はより健康な人々に較べると高まると思われるので，自己記述式に対する以上に配慮が必要である．

3. 参加観察法

都市の中にある，一人部屋専用ホテル（single room occupant hotel）の住人である精神障害者や老人を調査した Cohen と Sokolovsky[65)] およびアメリ

カ合衆国で生活しているプエルトリコ人の女性の network を調査した Garrison など[66]がこの方法を用いている．対象者の言語による表現や認知の世界と現実とのずれが生じる時にはこの方法は有効であろう．また，Social Support Network 現象は解明されていない部分が大きいので，現象の抽象化には役立つ方法である．しかし，この方法を用いた研究では，主として social network を対象としたものが多く，social support の主観的な側面が測定しにくい難点がある．また，特定の人々が，集落を作っている場合には観察しやすいが，そうでない場合には，個人の対象者に密着観察をせざるをえなくなる問題が生じる．

測定用具の例と問題点

この分野の理論と研究が発展するにつれて，測定用具の開発とその信頼性，妥当性の検定に関する研究が，1980年前後から多く発表されるようになった．手元にある文献から，現存する測定用具を表2に要約した[22)25)57)58)61)62)67)~70)]．これらの尺度は，未だ歴史が浅く，今後の研究に期待するところが多いが，新しい分野にしては堅実な発展を遂げているといえよう．

ある程度の標本数を必要とする研究では，自己記入法の質問紙に依るところが多い．その中でよく利用されている Norbeck Social Support Questionnaire を例にすると，これは対象者の一般的な Social Support Network を測定するものであり，ある特定の状況下にある対象群を研究する場合には，その状況に合った別の測定尺度と抱き合わせた形で使用することが必要になる[71]．たとえば，死を間近にした人，出産・育児を体験する人，失業した人，などはそれぞれに特有な support が必要であるから，一般の測定用具の他に特定の質問紙を発展させる必要があるだろう．

その意味では，日本人の Social Support Network を測定，観察する時には，日本社会の構造や文化的特徴を考慮に入れた測定用具を開発する必要がある．筆者は，日本人の甘えの社会心理構造に注目して「甘えネットワーク」の概念を提唱し，「甘えネットワーク質問紙」を開発し，青年女子480人を対象

表2　Social Support Networkの測定用具

用具名	概念枠組	構成要素	測定方法	信頼性検定	妥当性検定
Pattison Psychosocial Network Inventory（文献[22]）	Primary Social Matrix of an Individual	サイズ，関係，接触，情緒的緊密性，肯定的一否定的感情，手段的助力，相互性	自己記入式質問紙	報告なし	報告なし
Norbeck Social Support Questionnaire（文献[57][58]）	Kahnのsocial supportと護送	機能的側面として愛情，承認，助力。 構造的側面としてサイズ，期間，頻度。 最近の喪失。	自己記入式質問紙	テスト一再テスト信頼性，内部一貫性，反応バイアス	概念構成妥当性，基準的妥当性，予測的妥当性，基本的データベース
Interview Schedule for Social Interaction（文献[61]）	WeissのProvisions of social relationships	supportの存在と適切性。 supportには社会的所属性，愛着，価値の保証，信頼しうる他者，開放性と秘密性	面接法	内部一貫性，テスト一再テスト	因子分析
Personal Resources Questionnaire(PRQ)（文献[62]）	Weissのモデル Harvard大学作成の「自助理想」	Part Ⅰは存在する資源のタイプ，信頼しうる人の存在，これらの資源に対する満足度。 Part Ⅱは，親密性，社会的所属，養護，価値，助力，自助理想。	自己記入式質問紙	内部一貫性	内容妥当性，基準的妥当性，概念構成妥当性。
Natural Support Systems（文献[67]）	social networkの文献検討を基に	構造的特徴（サイズ，密度，多側面性）と満足的support system(社交，指導，助力，情緒的支持)	自己記入式質問紙と詳しい面接との組み合わせ。	報告なし	概念構成妥当性

表2（続） Social Support Networkの測定用具

用具名	概念枠組	構成要素	測定方法	信頼性検定	妥当性検定
Social Support Scale（文献[68]）	Madalie-Goldbourtの家族問題とLowenthal-Haven-Kaplanの伴侶	家族の問題，親密な人の存在，隣人と地域への満足度，表出的－手段的支援	面接法	内部一貫性	因子分析，概念構成的妥当性
Network Analysis Profile（文献[69]）		住人のつきあいを質的量的に観察。	参加観察法	観察者間信頼性	報告なし
Inventory of Socially Supportive Behaviors (ISSB), Arizona Social Support Interview Schdule (ASSIS)（文献[70]）	Barreraのモデル	ISSBは，情緒的苦悩の乗り越え，仕事の手伝い，アドバイス，技術の指導，物質的援助のような行為を含む。ASSISは，network構造とsupportへの満足度を含む。	自己記入式質問紙	内部一貫性，テスト－再テスト	基準的妥当性，概念構成妥当性
「甘えネットワーク質問紙」（文献[25]）	「甘えネットワーク」（南）	構造的側面（サイズ，期間，頻度，身内－義理など），機能的側面（依存－サポート，主客合体），評価的側面（満足，甘え度など）	自己記入式質問紙	内部一貫性，テスト－再テスト，反応バイアス	内容妥当性，基準的妥当性，概念構成妥当性，因子分析，基本的データベース

に信頼性妥当性の検定を行った．若干の修正を行なえば，日本の女性に関しての測定はできると自負している[25]．

しかし，「甘えネットワーク」の概念は，対象者が周りの人々から受ける影響のうちでも，特に positive な側面のみを取上げたものである．それは Norbeck の質問紙を初めとする多くの測定尺度でも同じである．アメリカ合衆国という文化圏の中では，成人した大人がつきあう人々の輪は，ある程度の選択が効いたものであるという前提に立っているのかもしれない．つまり，negative な影響しか与えない，またはその程度が強い人々とのつきあいは，避けることができるということであろう．しかし，日本の文化では，選択に依るつきあいのほうが少ないのかもしれない．従って，positive な面と negative な面を両方とも有する人々とつきあうことになる．そうなると，周りの人々（それがたとえ親族や友人であろうとも）とのつきあいは，その両面のバランスをみなければならない．ところで，「甘えネットワーク質問紙」では，そういう個人にとっては負担になる側面を3項目挿入して作成した．その結果，この3項目は得点を逆転したりなど分析に工夫をしても，他の項目とはまったく異なることが判明した．つまり，ひとつの質問紙に内包しえないものであること，従って，「甘えネットワーク質問紙」とは異なる尺度を別に作ることが望ましいことがわかったのである．

それはしかし，西欧諸国では似たような現象があるらしく，最近 social network のもたらす negative な側面を測定する尺度が開発されつつあるようだ[72]．

おわりに

1970年代後半から急速に注目されるようになった Social Support Network の理論と研究方法の概観をしてきたが，結論としていえることは，この領域の研究はまだ始まったばかりということである．しかし，世界の経済的状況や，社会心理的事情の変化に伴ってこの領域の研究は多大の注目を浴びている．すなわち，世界の不況は，国家的社会福祉の体制から個人の能力や自然発生的に

生じる社会資源への依存へその構造の変化を余儀なくしてきた．また，家庭構造と機能の崩壊の危機に面した西欧の現代社会では，家族に代わる社会的支援機構を求めるようにならざるをえなかったという事情がある．これらの社会的背景の下で，Social Support Network のもつ力に関する研究が注目されてきたといえよう．

また，医療問題の構造の変化もこの領域の研究を求めているといえよう．疾病の原因が単一の病原菌によるものよりも，複雑な条件の絡まりによることのほうが多い成人病や老人の問題，また，慢性疾患をもちながら生活する人々の増加などの問題は，健康問題を単に身体的なもののみならず，精神的，社会的側面から把握せざるをえなくなっている．そういう意味からも Social Support Network の理論と研究は，これから益々注目を浴びることになろう．しかし，社会心理的側面の問題は，その社会の文化的特徴を十分に考慮に入れる必要がある．日本の文化の中で，この Social Support Network が人々の健康にどのような影響を及ぼしているのかに関する研究がこれから必要になるだろう．また，情報化時代の今日，文化の変化もまためまぐるしい．自分の周りの人々とのつきあいへの期待や仕方も変わりつつある中で，Social Support Network の特徴も，またそれが個人に与える影響も変化しているのであろうか．さらに，Social Support Network の個人差に関する研究も注目されるようになるだろう．

一方，研究方法に関しても今のままでは表面的な把握にしかなりえない．研究デザインにしても，測定用具にしても今後の開発が必要である．

様々な課題を抱えながらもこの領域の研究は，人間の健康問題に新たな視点を開かせてくれるという点で重要である．特に筆者は，人間の現象を外から客観的に捕えるというよりも，個人の主観を通して，その意味を問う研究として注目に値するものだと考える．

引用文献

1) Barnes, J. (1972): Social networks, New York: Addison-Wesley Reprints.

2) Bott, E. (1971): Families and social networks, London: Tavistock.

3) Mayer, P.: Migrancy and the study of African in town, *Am. Anthrop.* 64: 576, 1962.

4) Mueller, D. P. (1980): Social networks: A promising direction for research on the relationship of the social environment to psychiatric disorder, *Social Science and Medicine*, 14A: 147～161.

5) Bryant, T. E.: The President's commission on Mental Health, Washington D. C.: US Government Printing Office, 1978.

6) Cassel, J. (1976): The contribution of the social environment to host resistance, *American Journal of Epidemiology*, 104: 107～123.

7) Kaplan,H. B., Robbins, C., and Martin, S. (1983): Antecedents of psychological distress in young adults ; Self-rejection deprivation of social support, and life events, *Journal of Health and Social Bahavior*, 24: 230～244.

8) Fuller, S. S., & Larson, S. B. (1980): Life events, emotional support, and health of older people, *Research in Nursing Health*, 3: 81～89.

9) Brandt, P. A. (1984): Stress-buffering effects of social support on maternal discipline, *Nursing Research*, 33(4): 229～234.

10) Norbeck, J. S., & Sheiner, M. (1982): Sources of social support related to single parent functioning, *Research in Nursing and Health*, 5: 3～12.

11) Gierszewski, S. A. (1983): The relationship of weight loss, locus of control, and social support, *Nursing Research*, 32: 43～47.

12) Horwits, A. (1977): Social networks and pathways to psychiatric treatment, *Social Forces*, 56: 86～105.

13) Dimond, M. (1979): Socical support and adaptation to chronic illness; The case of maintenance hemodialysis, *Research in Nursing and Health*, 2: 101～108.

14) Hammer, M. (1963～64): Influence of small social networks as factors on mental hospital admission, *Human Organization*, 22: 243～251.

15) Tolsdorf, C. C. (1976): Social networks, support, and coping: An exploratory study, *Family Process*, 15: 407～417.

16) Schizophrenic Bulletin, 4, 1978.

17) ANA Commission on Nursing Research: Generating a scientific basis for nursing practice; Research priorities for the 1980s, *Nursing Research*, 29: 219, 1980.

18) Cohen, C. I., & Sokolovsky, J. (1979): Clinical use of network analysis for

psychiatric and aged populations, *Community Mental Health Journal*, 15: 203～213.

19) Mitchell, J. C. (Ed.): Social Networks in Urban Situations, Manchester, England: University Press, 1969, p. 2.

20) Hammer, M. et al : Social network and schizophrenia, *Schizophrenia Bulletin*, 1978, 4: 523.

21) 前掲20) p. 523.

22) Pattison, E. M., & Pattison, M. L. : Analysis of a schizophrenic psychosocial network, *Schizophrenia Bulletin*, 1981, 7: 135～143.

23) Henderson, S., & Byrne, D. : Toward a method for assessing social support systems, *Mental Health and Society*, 1977, 4: 164～170.

24) 土居健郎：「甘え」の構造，弘文堂，1971, p. 23-68.

25) Minami, H. : The construction and validation of a measure of amae network, Unpublished dissertation, University of California, San Francisco, 1982.

26) Mitchell, J. C. (1969) : The concept and use of social networks, *In* J. C. Mitchell (Ed.) : Social networks in urban situations ; Analyses of personal relatioships in central African towns (pp. 1～50), Manchester : Manchester University Press.

27) Burt, R. S. (1980): Models of network structure, *Annual Review of Sociology*, 6: 79～141.

28) Caplan, G. (1974): Support systems. *In* G. Caplan (Ed.) : Support systems and community mental health ; Lectures on concept development (pp. 1-40), New York : Behavioral Publications.

29) Weiss, R. J. (1974) : The provisions of social relationships, *In* Z. Rubin (Ed.) : Doing unto others (pp. 17～26), Englewood Cliffs, N. J. : Prentice Hall.

30) Cobb, S. (1976) : Social support as a moderator of life stress, *Psychosomatic Medicine*, 38: 300～314.

31) House, J. S. : Work stress and Social Support, Addison-Wesley, 1981.

32) Kahn, R. L., & Antonucci, T. C. (1980): Convoys over the life course ; Attachment roles and Social Support, *In* P. B. Baltes and O. Brim (Eds.) : Life-span development and behavior (Vol. 3) (pp. 253-286), New York : Academic Press.

33) 前掲25).

34) 江口恵子：依存性の研究，教育心理学研究，1966, 14, p. 45～58.

35) 大原健士郎（編）：依存の精神医学，医学書院，1975.

36) Norbeck, J. S. (1982): The use of social support in clinical pracice, *Journal of Psychosocial Nursing*, 20 (12): 22～29.

37) 前掲19).
38) Merton, R.: Social theory and social structure (rev ed.), London: Free Press of Glencoe, 1964.
39) Broadhead, W., Kaplan, B., James, S., Wagner, H., Schoenbach, V., Grimson, R., Heyden, S., Tibblin, G., and Gelbach, S. (1983): The epidemiologic evidence for a relationship between social support and health, *American Journal of Epidemiology*, 117: 521～537.
40) Cochran, M., & Brassard, J. A. (1979): Child development and personal social networks, *Child Development*, 50: 601～616.
41) Lindsey, A. M., Norbeck, J. S., Carrieri, V. L., & Perry, E. (1981): Social support and health outcomes in post-mastectomy women; A review, *Cancer Nursing*, 4: 377～384.
42) Mitchell, R. E., & Trickett, E. J. (1980): Social networks as mediators of social support; An analysis of the effects and determinants of social networks, *Community Mental Health Journal*, 16: 27～44.
43) Murrell, S. A., and Norris, F. H. (1983): Resources, life events, and changes in psychological states; A prospective framework, *American Journal of Community Psychology*, 11: 473～491.
44) Sarason, I. G. (1979): Life stress, self-preoccupation, and social supports (Report No. SCS-LS-008), Office of Naval Research, Arlington, Virginia: Organizational Effectiveness Research Program, April. (Contract No. N0014-75-C 0905, NR-170, 804).
45) Heller, K. (1979): The effects of social support; Prevention and treatment implications, *In* A. P. Goldstein & F. H. Kanfer (Eds.): Maximizing treatment gains; Transfer enhancement in psychotherapy (pp. 353～382), New York: Academic Press.
46) 前掲22).
47) 前掲6).
48) 前掲30).
49) Cherniss, C.: Staff burnout; Job stress in the human services, Beverly Hills, Calif, 1980, Sage Publications pp. 1～197.
50) Cronin-Stubbs, D, Rooks, C. A.: The stress, social support, and burnout of critical nurses; The results of research., *Heart and Lung*, 14 (1): 31～39, 1985.
51) Norbeck, J. S.: Differential types and sources of social support for married and unmarried nurses for managing job stress in critical care, Pressented at the 16th

Annual Communicative Nursing Research Conference of the Western Society for Research in Nursing, May, 1984 in San Francisco.

52) Gray-Taft, P. : Effectiveness of a counselling support program for hospice nurses, *Journal of Counselling Psycholoy*, 27 : 346, 1980.

53) Paredes F. C. : The relationship of psychological resources and social support to occupational stress and burnout in hospital nurses. *In* Dissertation abstracts international, Houston, 1932. University of Houston Press, vol. 43, no. 881-B. (University Microfilms No. DA8217213.)

54) 井部俊子，他：看護婦の Burnout と motivation に対する仕事のストレスと Social support の影響，第4回日本看護科学学会発表，1984，12.

55) 前掲51).

56) Minami, H. et. al : Differential types and sources of social support for nurses living with family and nurses living without family for managing workstress in a Japanese general hospital, Presented at the lst. International Nursing Research Conference on Social Support, 1985. 6., Israel.

57) Norbeck, J. S., Lindsey, A. M., Carrieri, V. L. : The development of an instrument to measure social support, *Nursing Research*, 30 : 264, 1981.

58) Norbeck, J. S., Lindsey, A. M., Carrieri, V. L. : Further development of the Norbeck Social Support Questionnaire ; Normative data and validity testing, *Nursing Research*, 32 : 4, 1983.

59) 書前23).

60) Gottlieb, B. H. (1978): The development and application of informal helping behaviors. *Canadian Behavioral Science*, 10 : 105～115.

61) Henderson, S., & Byrne, D. (1977): Towards a method for assessing social support systems, *Mental Health and Society*, 4 : 163～170

62) Brandt, P. A., & Weinert, C. (1981) : The PRQ : A social support measure, *Nursing Research*, 30 : 277～280.

63) Pridham, K. F., Egan, K. B., Chang, A. S : Life with a new baby ; The first ninety deep stressor and supports, Presented at the lst. Internatinal Nurses Research Conference on Social Support.

64) 西尾鏡子：Social network と social suport に対する精神分裂病患者の主観的認知の分析，昭和59年度，聖路加看護大学大学院修士論文.

65) Cohen, C. I., & Sokolovsky, J. (1978): Schizophrenics and social networks : Ex-patients in the inner city, *Schizophrenia Bulletin*, 4 : 546～560.

66) Garrison, V. (1978): Support systems of schizophrenic and nonschizphrenic Puerto

Rican migrant women in New York City, *Schizophrenia Bulletin*, 4: 561~596.
67) Hirsh, B. J. : Natural support systems and coping with major life changs, *American Journal of Communiy Psychology*, 1980, 8: 159~171.
68) Lin, M., Dean, A., & Ensel, W. M. : Social support scales ; A methodological note, *Schizophrenia Bulletin*, 1981, 7: 73~89.
69) Sokolovsky, J., & Cohen, C. I. : Toward a resolution of methodological dilemmas in network mapping, *Schizophrenia Bulletin*, 1981, 7: 109~116.
70) Barrera, M., Jr., Sandler, I. N., & Ramsay, T. B. : Preliminary development of a scale of social support ; Studies on college students, *American Journal of Community Psychology*, 1981, 9: 435~447.
71) Norbeck, J. S. : Keynote Address, The lst. International Nursing Research Conference on Social Support, Israel June, 1985.
72) Tilden, V. : The development of an instrument to measure stress-producing aspects of social support, The lst. International Nursing Research Conference on Social Support, Israel, 1985.